

大学生における発達障害のグレーゾーンへの寛容的反応に関する研究
— 曖昧さへの態度との関連から —

石井観月*・細川美由紀**

（2020年8月31日受理）

A Study of Tolerance for People in Gray area of Developmental
Disorders in College Students

Mizuki ISHII* and Miyuki HOSOKAWA **

(Accepted August 31, 2020)

はじめに

「発達障害のグレーゾーン」とは、障害とも個性とも判断がつきにくいような発達障害の有無における曖昧な状態を指す場合が多い（鍛冶谷，2015；山本，2019）。近年、共生社会の理念や発達障害に対する社会的認知が広がる傾向にあることから、日常生活において、このような発達障害のグレーゾーンの範疇にある人とも協調的に関わりながら共生していくことが求められつつある。そのため、発達障害を抱える人たちに対して、周囲の人々がどのように認識しているかだけでなく、発達障害のグレーゾーンの範疇にある人たちに対する態度についても明らかにする必要があると考えた。

発達障害のグレーゾーンのように、曖昧な状態や存在に対する態度に関しては、これまでにさまざまな研究がなされてきている。「曖昧さ」についてBudner（1962）は、“十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態”と定義した上で、新奇性（手がかりが全くない状況）、複雑性（考慮すべき手がかりが多すぎる状況）、不可解性（個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況）の3つがあるとした。また、これまで曖昧さの評価は、曖昧性耐性の低さや曖昧さへの非寛容という否定的な側面に加え、曖昧さに対する肯定的態度にも注目した多次元の態度を測る尺度が用いられてきた。

曖昧性耐性とは、刺激の特徴を曖昧さという側面から捉え、それに対する反応の相違を個人差とみなす概念（今川，1981）であり、例えば、物事に白黒つけたがり、偏見や思い込みの傾向が強く、善悪をはっきりさせないと気が済まない思考は、曖昧性耐性が低い状態を指している。これまでに、

*茨城県立水戸飯富特別支援学校（〒310-4206 水戸市飯富町 3436-20；Mito Iitomi Special Needs Education School, Mito 310-4206 Japan）。

**茨城大学教育学部障害児教育教室（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；Laboratory of Education for children with Disabilities, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）。

曖昧性耐性の低さと不安（吉川，1980），ストレスの評価（増田，1998），認知的完結欲求（鈴木・桜井，1999）などとの関連が報告されている。また，友野・橋本（2002）は類似の概念として「あいまいさへの非寛容」を取り上げており，性差による検討もなされている。

このように人は曖昧さを知覚したとき，不安になることもある一方で，曖昧さに対して安定して受容できることや面白さを発見することもある。西村（2007）は，曖昧さへの態度に「享受」「不安」「受容」「統制」「排除」の5つの側面を見出し，肯定的態度にも注目する必要性を述べている。この西村（2007）が作成した曖昧さへの態度尺度を用いた研究として，妄想性障害（津田，2015）や強迫傾向（清水・清水，2017），抑うつ（友野，2015）などとの関連について検討したものがある。例えば，津田（2015）では，妄想性障害の素因として曖昧さへの態度のうち「不安」や「統制」といった否定的態度が関連していることを報告している。また，強迫傾向にある学生は「受容」との関連において，曖昧な状況を受容できずに嫌悪対象と認知することが強迫傾向の脆弱性要因になることが示された（清水・清水，2017）。さらに，曖昧さに否定的態度をもつ者は，他者に気を遣うような出来事が多寡に関わらず抑うつが増大することが示されている（友野，2015）。このように，ネガティブな行動傾向がある学生は，曖昧さを多次的に測る尺度を用いた場合，曖昧さへの否定的態度との関連は多く報告されているが，肯定的態度と様々な特性との関係についての報告が少ない。また，曖昧さにおける肯定的側面が，日常生活にどのような影響を与えるのかということまでは明らかになっていない。

加えて，「発達障害のグレーゾーン」のように，「曖昧な存在」に対する態度と，「曖昧さ」への態度はどのように関連するのであろうか。このような「曖昧な存在」については，新入成員（転校生，初対面の人など）や留学生との関連で報告がなされている。植村（2001）は，大学生を対象とし，「既存成員との相互作用の期間がないまま，集団成員性だけではすでに獲得してしまっている」不確実で曖昧な存在である新入成員に対する態度について，「積極的関与」および「異質耐性」の2因子から構成される寛容的反応尺度を用いて評価し，それらの傾向と曖昧耐性との関係性について検討した。その結果，新入成員への積極的な関わりについては，曖昧耐性との関連性が低いことが明らかとなった。一方，曖昧耐性が低い人は，曖昧耐性が高い人に比べ，異質な新入成員の受容に抵抗を示すことが明らかとなった。

また，米田（2012）によると，留学生とのコミュニケーションは，相手の言語や文化に対する知識や情報の欠如から，同じ文化的背景をもつ日本人とのコミュニケーションに比べ，曖昧な状況が多い存在であることを述べている。そこで米田（2012）は，異文化接触行動の多い学生が少ない学生に比べ，Tolerance of Ambiguity（曖昧さに対する反応の個人差）のポジティブな側面が強く，ネガティブな側面は弱いという仮説を立てた。その上で，大学生を対象として，西村（2007）が作成した曖昧さへの態度尺度と友野・橋本（2005）が作成した改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度を用いて質問紙調査を実施した。その結果，曖昧さへの「不安」や「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が高い学生は，留学生との接触場면을ネガティブに捉え，接触が抑制されることを明らかにした。一方で，曖昧さをポジティブに捉える傾向である曖昧さの「享受」や「受容」は，異文化滞在経験のある学生，留学生交流サークルに所属する学生，留学生との接触経験のある学生，いずれの群間においても有意な差がみられなかったと述べている。

以上のように，これまでに報告された曖昧さへの態度に関する研究では，曖昧さを認識した際の

否定的側面に注目して検討したものが多く、肯定的側面についての報告が少ないことが明らかとなった。その中でも西村（2007）は、植村（2001）の研究において使用された「短縮版曖昧さへの耐性尺度」に関して、曖昧さへの肯定的態度に関する項目が不十分であることを指摘している。このことから、曖昧さに対する否定的態度のみならず、肯定的な態度も含めた尺度を用いることにより、曖昧さへの態度に関する多面的な検討が可能になると考えた。また、「曖昧な存在」として新入成員や留学生に関する検討は存在するものの、発達障害のグレーゾーンを対象にした研究は見当たらない。そのため、対象となる人物像には植村（2001）で扱った新入成員を発達障害のグレーゾーンを想定した人物像に置き換えることにより、大学生が障害の有無における曖昧な人物に対してどのような反応を示すのか、およびそれらの反応は普段の日常生活における曖昧な状況に対する振る舞いと関係はあるのかについて明らかにしたいと考えた。加えて、教育学部に在籍する学生を調査対象とすることで、将来教員として、外見から判断しづらい発達障害やグレーゾーンの子どもたちなどを見取る際に、その人の曖昧さへの態度がどのように関与しているのかを知ることができると考えた。

そこで本研究では、教育学部学生における発達障害のグレーゾーンの範疇にある人物に対する態度と曖昧さへの態度との関連性を明らかにすることを目的とする。この研究によって得られた知見は、曖昧さへの態度や他者への寛容さについての見方を広げることが期待される。

方 法

1. 調査対象

調査対象は、A大学教育学部の1年次に在籍する大学生234名であった。その中で有効回答が得られた195名（男性71名、女性123名、その他1名）を本研究の分析対象とした（有効回答率83.3%）。

2. 調査時期

調査は20XX年11月に実施された。

3. 調査内容

調査に使用した質問紙は、「曖昧さへの態度尺度」、ならびに「発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度」の2つの設問から構成される。以下に各設問の内容について示す。

(1) 曖昧さへの態度尺度

西村（2007）が大学生を対象として作成した曖昧さへの態度尺度を使用した。この質問紙は、曖昧さへの否定的態度である「不安」「統制」「排除」と、肯定的態度である「享受」「受容」の5因子26項目より構成されている。対象者は、各項目が示す日常生活における曖昧な状況への反応に対して、どの程度当てはまるかについて6件法で回答する。本研究においても、各項目に対して、「全く当てはまらない（1点）」「当てはまらない（2点）」「どちらかといえば当てはまらない（3点）」「どちらかといえば当てはまる（4点）」「当てはまる（5点）」「非常に当てはまる（6点）」の6件法

で回答を求めた。得られた得点が高いほど、各因子の傾向が強いことを示す。

(2) 発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度

植村（2001）が大学生を対象として作成した新入成員に対する寛容的反応尺度を、予備調査の結果を参考にして発達障害の有無に関して曖昧な人物像に対する教示文に変更した。

① 予備調査

予備調査では、特別支援教育を専攻する大学生 24 名を対象に、鈴木・東條（2014）を参考に 9 つの発達障害を想定した人物像に関する教示文を作成した。教示文では、その人物を一言で表す単語（障害特性）と、対人状況においてその特徴をもっているがゆえに起こり得るポジティブな面・ネガティブな面をそれぞれ示すという流れで構成した。文章の順番によって回答に影響が出る可能性を考え、ポジティブな面とネガティブな面の記述順序を入れ替えた 2 種類の質問紙を用意し、対象者にはどちらか一方の質問紙に回答を求めた。対象者には、これらの人物像が表記された教示文を読み、障害の有無の印象について「明らかに発達障害でない（1点）」「どちらかといえば発達障害でない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば発達障害である（4点）」「明らかに発達障害である（5点）」の 5 件法で回答を求めた。なお、これらの教示文については、大学の同級生という身近な存在に設定にすることで、回答者が場面を浮かべやすいようにした。合わせて、対象者の過去の似たような人物との関わりが回答に影響することを減らすために、回答時に特定の人物を想定しないようにとの但し書きを加えた。

その結果、平均点が 3（「どちらともいえない」）に近く（平均点が 2.6 以上 3.4 以下）、評価のばらつきが大きい（標準偏差が 1.0 以上）2 つの教示文の中から、「人の気持ちを察するのが苦手な場の空気を読めないが、誰の前でも態度を変えずに平等に接してくれる」（平均値 2.66 ± 1.17）を採用した。

② 尺度の作成

尺度の作成については、決定した教示文に合わせて植村（2001）の質問項目を見直し、最終的に 11 項目に絞った。これらの質問項目は、「積極的関与」と「異質耐性」の 2 因子で構成されている。この尺度では、大学の同級生という集団において、教示文に提示された発達障害の有無における曖昧な存在を示す架空の人物に対して各項目が示す振舞いについて、「当てはまらない（1点）」「どちらかといえば当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば当てはまる（4点）」「当てはまる（5点）」の 5 件法で回答を求めた。得られた得点が高いほど、提示された架空の人物に対する態度が受容的であることを表している。表 1 に寛容的反応尺度の教示文を、表 2 に質問項目を示す。

4. 調査手続き

(1) 質問紙の配布並びに回収

質問紙は、大学で行われた講義の最初の時間に、講義を受講する学生全員に配布した。対象者には質問紙配布後に本調査の目的と実施方法について文書とともに口頭で説明した。質問紙は、講義終了後に、教室内の出入り口付近に設置した回収箱にて回収した。

表1 寛容的反応尺度の教示文

教示文
<p>あなたとAさんは、大学で同じ学科の同級生であると仮定します。Aさんの人物像を示した以下の文章を読み、あなたは、Aさんに対して以下の反応をどのくらい行いますか。最も当てはまるところに○をつけてください。その際、特定の人物を想定せずに回答してください。</p> <p>(Aさんの人物像)</p> <p>人の気持ちを察するのが苦手な場の空気を読めないが、誰の前でも態度を変えずに平等に接してくれる</p>

表2 寛容的反応尺度の質問項目

No.	質問項目
1.	学科内の人間関係が壊されないか心配する*
2.	その人が学科のメンバーの雰囲気と異質でも、当然として受け入れる
3.	その人の色々な面を知ろうとする
4.	自分と考えが合わないときがあれば避けたいと思う*
5.	積極的にこちらから相手のことを知ろうとする
6.	相手の気持ちを考えて、色々と話しかける
7.	相手とじっくりと付き合いこようとする
8.	その人の参加を喜び、積極的に受け入れる
9.	積極的に集団の仕組みのことなどを教えてあげる
10.	相手に露骨でない程度に気をつかう
11.	その人が馴染めるように他の人にも呼びかける

*逆転項目

(2) 調査時間

質問紙の回答目安として10分を設定した。

(3) 分析方法

質問紙における各尺度について、因子分析を行った。曖昧さへの態度尺度では主因子法によるバリマックス回転を、発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度では、主成分分析によるバリマックス回転を実施し、抽出された因子についてそれぞれ因子得点を算出した。さらに、曖昧さへの態度尺度と発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度の関連を検討するため、相関分析を行った。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙とは別に文書を配布し、その中に参加は強制ではないこと、いつでも回答を中止できること等を明記し、口頭においても十分に説明した。インフォームドコンセントについては、本研究が無記名での参加という特性上、質問紙への回答および提出によってその意思を示すこととした。

結 果

1. 曖昧さへの態度尺度

(1) 因子分析

表3に、曖昧さへの態度尺度における因子分析結果を示す。質問項目26項目のうち、7項目（項目1・14・15・19・20・24・26）を削除後、主因子法によるバリマックス回転を行い、回転後の因子負荷量が0.4以上を項目選択の基準としたところ、5つの因子が抽出された。これらの因子について西村（2007）にならい、第1因子の6項目を「不安」、第2因子の5項目を「受容」、第3因子の3項目を「享受」、第4因子の3項目を「統制」、第5因子の2項目を「排除」と命名した。

(2) 各因子得点の平均

曖昧さへの態度尺度における各因子得点の平均および標準偏差は、「享受」で4.26（±0.78）点、「不安」で4.08（±0.76）点、「受容」で3.90（±0.72）点、「統制」で4.41（±0.78）点、「排除」で3.81（±1.03）点であった。

(3) 各因子得点間の相関係数

各因子得点間の関連性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した。表4に相関係数の一覧を示す。

その結果、「享受」と「受容」($r=0.44$)、「統制」($r=0.42$)、「不安」と「統制」($r=0.43$)において、1%水準で有意な中程度の正の相関が認められた。その他、「享受」と「不安」($r=0.31$)、「受容」と「統制」($r=0.28$)において、1%水準で有意な弱い正の相関が認められた。また、「不安」と「受容」($r=0.14$)、「排除」($r=0.17$)、ならびに「統制」と「排除」($r=0.15$)において、5%水準で有意な僅かな正の相関が認められた。一方で、「受容」と「排除」($r=-0.16$)においては、5%水準で有意な僅かな負の相関が認められた。「享受」と「排除」においては、有意な相関は認められなかった。

2. 発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度

発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度の各質問項目について、主成分分析によるバリマックス回転を行い、成分行列の因子負荷量.36以上を項目選択の基準とした。

その結果、1因子が見出され、11項目中10項目（項目番号1以外）が.36以上の負荷を示した。そのため、この因子を「寛容的反応」と命名した。この尺度における対象者の平均得点は3.48（±0.63）点であった。

表3 曖昧さへの態度尺度の因子分析結果

質問項目	因子				
	1	2	3	4	5
12 見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある	0.67	0.06	-0.04	0.04	0.18
25 情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう	0.62	0.16	0.10	0.13	-0.01
2 はっきりしない状況ではどうしたらいいか分からなくなる	0.56	0.05	0.23	0.18	0.04
21 色々な可能性があるとして、選ぶのに時間がかかって迷う	0.55	-0.05	0.12	0.05	0.35
17 はっきりしない状況におかれると、不安になる	0.52	0.18	0.00	-0.12	0.10
7 見たことがないものに出会うと怖くなる	0.46	0.08	0.04	0.14	0.31
18 不完全なところも、ある程度受け入れられる	0.06	0.71	0.19	-0.07	0.23
8 不完全なままにしておいた方がよい時もある	0.20	0.66	0.08	0.06	0.14
13 不完全なことがあるから面白い	0.08	0.63	0.07	0.00	-0.10
3 はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある	0.00	0.59	-0.06	0.15	0.24
22 はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのが良い	0.22	0.46	0.00	0.04	0.39
16 色々な可能性があるとして、選べるのでうれしい	0.11	0.11	0.79	0.00	0.11
6 いくつかの解釈ができると、色々な角度から物事を見れる点では自由な感じがする	0.01	0.05	0.75	-0.06	0.08
11 見たことがないものには想像力をかきたてられる	0.14	0.08	0.65	-0.24	-0.01
9 情報が足りないと正確な判断はできない	0.01	0.13	-0.14	0.71	0.12
4 情報が足りないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい	0.16	-0.06	-0.05	0.70	0.21
23 一貫していないことには信頼がおけない	0.45	0.15	-0.27	0.52	-0.25
5 どっちつかずな立場は、どちらか一方にはっきりさせるべきだ	0.19	0.24	0.08	0.17	0.56
10 どっちつかずであることは良くないと思う	0.18	0.20	0.10	0.08	0.51
1 色々な可能性があるとして、すべてを試してみたい					
14 確実でないところは確認して明らかにしたい					
15 はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい					
19 色々な可能性がある時には、様々なことを考慮して対処法を考えておきたい					
20 見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい					
24 不完全なことは、完全にしていくプロセスがあって面白い					
26 いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくので面白い					

点線以下：削除項目

表4 曖昧さへの態度尺度得点間の相関係数

	享受	不安	受容	統制	排除
享受	—	0.31**	0.44**	0.42**	0.13
不安	0.31**	—	0.14*	0.43**	0.17*
受容	0.44**	0.14*	—	0.28**	-0.16*
統制	0.42**	0.43**	0.28**	—	0.15*
排除	0.13	0.17*	-0.16*	0.15*	—

** $p < .01$ * $p < .05$

3. 曖昧さへの態度尺度と発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度の関連

対象者における各尺度における因子得点間の関連性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した。表5に相関係数の一覧を示す。

その結果、「寛容的反応」と「享受」「不安」「統制」の項目の組み合わせにおいて、有意な正の相関が認められた（「享受」： $r=0.35, p<.01$ 、「不安」： $r=0.20, p<.01$ 、「統制」： $r=0.17, p<.05$ ）。

さらに曖昧さへの態度が寛容的反応に与える影響を検討するため、発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応の因子得点を従属変数、曖昧さへの態度尺度の各因子得点を独立変数として強制投入法による重回帰分析を実施した。表6に重回帰分析の結果を示す。その結果、有意であった標準偏回帰係数（ β ）は、「享受」因子（ $\beta=0.38, p<.01$ ）であった。この回帰式の説明係数（ R^2 ）は0.12であり、有意であった（ $F [5, 189] =6.37, p<.01$ ）。

考 察

1. 大学生における曖昧さへの態度の特徴

本研究の目的は、大学生の日常生活における曖昧さへの態度をもとに、発達障害のグレーゾーンの範疇にある同じ学科の同級生に対する寛容的反応および反応決定に関する曖昧さへの態度の影響を明らかにすることである。そこで本項ではまず、大学生の日常生活における曖昧さへの態度の傾向について検討する。

曖昧さへの態度尺度における尺度得点間での相関分析の結果、否定的態度の側面では、「不安」と「統制」、「不安」と「排除」、「統制」と「排除」にいずれも有意な正の相関が認められた。曖昧さに情緒的な脅威を感じたり（「不安」）、曖昧な状況を否定的に評価し、知的に把握・対処しようとしたり（「統制」）、曖昧さを排除しようとしたり（「排除」）する傾向は、いずれも否定的態度である。そのため、上述した相関分析の結果は否定的態度同士でのつながりを反映していると捉えることができる。その中でも、「不安」と「統制」との関係が最も強かった。その理由として、「排除」は曖昧さを認めず、意図的に排除に向けて行動するのに対し、情緒的否定的態度である「不安」と認知的否定的態度である「統制」は、お互いに関係し合っているという意味で近い概念であり、「排除」ほど強く拒否している訳ではないため、両者の間において相関が高かったと考えられる。

一方肯定的態度の側面では、「享受」と「受容」に有意な正の相関が認められた。曖昧さを楽しみを見出す「享受」や、曖昧さを認めてそのまま受け入れる「受容」は、どちらも肯定的態度であるため、結びつきが強かったことが予想される。

また、本研究において西村（2007）と一致した点が2点あった。1点目は、「受容」と「排除」に有意な負の相関が認められたことである。これは、「受容」は曖昧さをそのまま認めて受け入れることができる傾向であるのに対し、「排除」は曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい傾向であり、真逆の概念であるためと考えられる。2点目は、「享受」と「統制」に有意な正の相関が認められたことである。これは、どちらも曖昧さを認めるとそれに関与していこうとする傾向を含んでいるためと考えられる。

その他の相関においては、「享受」と「不安」、ならびに「受容」と「不安」に有意な正の相関が認められた。本研究と同様に吉川（1980）においても、曖昧さと「不安」との関連は報告されて

表5 曖昧さへの態度尺度と発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度の相関係数

因子	享受	不安	受容	統制	排除
寛容的反応	0.35**	0.20**	0.06	0.17*	0.04

** $p < .01$ * $p < .05$

いるため、「不安」は曖昧さの肯定的態度である「享受」や「受容」にも間接的に影響をおよぼしていることが考えられる。さらに、「受容」と「統制」についても有意な正の相関が認められた。「受容」は曖昧さへの肯定的態度であり、「統制」は曖昧さへの否定的態度である。これは、「受容」が曖昧さをそのまま受け入れる態度であり、その際、刺激によっては、曖昧さを知的に把握し安定して受け入れられる場合もあれば、曖昧さが脅威となるのに避けられずに受動的に受け入れてしまい知的に対処する場合が考えられるため、有意な相関が認められたことが推測される。

表6 発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応得点を従属変数とした重回帰分析

独立変数	β
享受	0.38**
不安	0.10
受容	-0.13
統制	0.01
排除	-0.04
R^2	0.12**

** $p < .01$

2. 大学生における発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応の特徴

本項では、大学生における発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応の特徴について、因子分析ならびに尺度得点の結果を基に述べていく。

まず、本研究において参考にした植村（2001）による新入成員に対する寛容的反応尺度は、「積極的関与」と「異質耐性」の2因子から構成された。しかし、因子分析の結果、2因子に分かれず1因子のみが抽出された。この理由については以下の2点が考えられる。1点目は、対象を変更した点である。教示文に示す対象を新入成員から発達障害のグレーゾーンに変更したことで、植村（2001）とは異なる因子分析結果が得られたことが想定される。2点目は、本研究においては所属する集団を設定した点である。植村（2001）の場合、回答者が自由に集団を思い浮かべ、その集団に初対面の人がやってくるという設定だった。しかし、本調査は大学生の同級生という設定であったため、同じ分野に興味があるという共通項もあるため、もともと仲間意識の前提があり、「異質耐性」の因子が抽出されなかったのではないかと考える。また、教育学部の場合、教科や領域に特化した専門的知識や技術を学ぶことができるので、学科という点にアイデンティティーがあると考えれば、もともと集団同一性が存在する集団であると仮定でき、その集団に入ってくる際には、異質な人物でも同じ学科の仲間として受け入れようとする教育学部の特徴があるのかもしれない。

次に、尺度得点についてみていくと、本研究で得られた平均値は3.48（ ± 0.63 ）とばらつくことなく、概ね中央値付近に位置していた。このように得点が中央値付近に位置する傾向は、植村（2001）の結果とも概ね一致していた。このことから、特定の設定に由らず「曖昧な存在」に対しては、寛容になれるかなれないかも態度を決めかねた結果、寛容でもなく非寛容でもない態度をとる者が多いことが推測された。

3. 発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応と曖昧さへの態度との関連

本項では、発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応が曖昧さへの態度に与える影響について検討していく。

発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度得点と曖昧さへの態度尺度における各得点についての重回帰分析を行った結果、寛容的反応尺度得点に対して曖昧さへの「享受」得点が有意な因子として抽出された。この結果から、発達障害のグレーゾーンに該当する人物に対して寛容的に振る舞う傾向がある人ほど、曖昧さに楽しみを見出し関与できることが示された。曖昧さの肯定的態度との関連がみられたことは、本研究と同様に「曖昧な存在」を扱った植村（2001）や米田（2012）とは異なる結果である。この理由として考えられる理由を2点述べる。

1点目は、「曖昧な存在」として使用した対象が異なることである。植村（2001）では新入成員、米田（2012）では留学生を「曖昧な存在」として設定していた。それに対し、本研究では「曖昧な存在」として発達障害のグレーゾーンを使用したことが、曖昧さへの肯定的態度との関連に影響した可能性が考えられる。この背景には、インクルーシブ教育や共生社会の発展に伴い、障害理解の促進や他者の多様性を受け入れ協調的に関わる姿勢が身に付いていることが表れているのかもしれない。

2点目は、回答者の集団同一性の高さである。植村（2001）は、「集団同一性が高い人は、あいまいさへの耐性も高ければ、仲間意識が強い分、異質な新入成員に対しても特に寛容になれる」と述べており、集団同一性が比較的高いことが予想される教育学部においては、曖昧さへの肯定的態度との関連がみられ、発達障害のグレーゾーンに該当する人物に対しても寛容であったと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、教育学部に在籍する大学生における発達障害のグレーゾーンという曖昧な存在である同級生に対する教育学部大学生の寛容的反応および反応決定に関する曖昧さへの態度の影響を明らかにすることを目的とした。

その結果、曖昧さへの態度尺度と発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応尺度の2つの尺度の関連から、発達障害のグレーゾーンに該当する人物に対して寛容的に振る舞う傾向がある人は、曖昧さに楽しみを見出し関与できることが示唆された。このことは、曖昧さを積極的に享受できるパーソナリティーをもつことが、障害の有無がはっきりしていない人物に対しての寛容的な振る舞いに影響していることを示す資料になると考えられる。実際に他者と関わる際には、障害の有無を意識せずに人と関わる場面も多いように思われる。ここで得られた知見は、障害の有無について曖昧なままでも丸ごと受け止めることができる寛容さの意義を示しており、そのようなパーソナリティーによって、曖昧さへの態度や他者への寛容さについての見方を広げ、人間関係を良好に保つために効果的に働くことが期待できる。

今後の課題としては、発達障害のグレーゾーンに対する寛容的反応得点から、全体的傾向として「曖昧な存在」に対する振る舞いに偏りが認められなかったことが挙げられる。この原因としては、今回作成した尺度の妥当性が十分でなかったことが考えられる。本研究では、植村（2001）の新入成員に対する寛容的反応尺度から教示文における対象や集団を変更したにも関わらず、質問項目を変更しなかったことで因子構造が変化し、結果に影響した可能性がある。また、本研究では植村

(2001)と同様に5件法で回答を求めたため、結果的に「3. どちらともいえない」を選択する回答者が多かった可能性が考えられる。そのため、中央評定値である「どちらともいえない」を設定しないことで、寛容的反応の分布の偏りや特徴、回答の傾向が寛容的反応と対応するのかなど、より明確に明らかになることが増えるかもしれないので、今後の課題としたい。

引用文献

Budner, S. 1962. "Intolerance of ambiguity as a personality variable". *Journal of Personality*, 30, 29-50.

今川民雄. 1981. 「Ambiguity Tolerance Scaleの構成 (1) - 項目分析と信頼性について -」『北海道教育大学紀要第一部C教育科学編』32, 79-93.

鍛冶谷静. 2015. 「DSM-5の改訂とグレーゾーンの子どもの支援」『四條学園短期大学紀要』48, 25-29.

増田真也. 1998. 「曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響」『茨城大学教育学部紀要』47, 151-163.

西村佐彩子. 2007. 「曖昧さへの態度の多次元構造の検討 - 曖昧性耐性との比較を通して」『パーソナリティ研究』15 (2), 183-194.

清水健司・清水寿代. 2017. 「思考抑制と曖昧さ耐性が強迫傾向に及ぼす影響」『信州大学人文科学論集』4, 103-112.

鈴木公基・桜井茂男. 1999. 「認知的完結欲求と権威主義・独断主義・曖昧さに対する不耐性との関連」『日本教育心理学会総会発表論文集』41, 161.

鈴木友歩子・東條吉邦. 2014. 「大学生における発達障害の理解に関する研究」『茨城大学教育学部紀要教育科学』(63), 157-181.

友野隆成・橋本宰. 2002. 「あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコピーングに与える影響」『性格心理学研究』11 (1), 24-34.

友野隆成・橋本宰. 2005. 「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み」『パーソナリティ研究』13 (2), 220-230.

友野隆成. 2015. 「曖昧さに対する態度と抑うつの関連性の素因ストレスモデルによる検討」『ストレス科学研究』30, 162-166.

津田恭充. 2015. 「曖昧さへの態度とパラノイア」『対人社会心理学研究』15, 71-76.

植村善太郎. 2001. 「あいまいさへの耐性と集団同一性が新入成員への寛容的反応に及ぼす効果」『性格心理学研究』10 (1), 27-34.

山本智子. 2019. 「学校現場において発達障害の「診断」がもたらすもの：教員、保護者、子どもの「診断」をめぐる多様な語りからその本質的意味を問う」『近畿大学教育論叢』30 (2), 1-24.

米田晃久. 2012. 「Tolerance of Ambiguity概念の再考と曖昧な場面における行動との関連 - 異文化接触場面を中心として -」『神戸大学大学院国際文化科学研究科博士論文』

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1005544y.pdf> (2020.8.31 閲覧).

吉川茂. 1980. 「Ambiguity Toleranceの程度と適応性」『教育学科研究年報』6, 35-40.